

「反戦のための万国博」総括

— ワークキャンプ方法論序説 —

徳 永 進

一九六九年八月七日から十一日までの五日間、ベ平連を中心にした全国各グループが大阪城公園のグラウンドで、反戦のための万国博を開いた。

これは、その会場に「交流の家」から参加した『らいの家』の総括をワークキャンプの方法論の一面で総括したものです。

『序』

ほくが大切にしたいのは、『私』と『対象』との間に生じる緊張（連帯・つながり）を生む方法論です。それは、いつも不十分な方法でしかなく、つねに逃げてしまふ、うちあげた火花が消えるといった意味で「程度」の問題としてでしか考えられないのです。誰かが建ててくれた家から出発するのと、金を自分たちで集めて建ててもらった家から出発するのと、自分たちの肉の疲労で建てた家から出発するのと、緊張（連帯・つながり・結婚・心中）が違ふということです。ほくらの不解な行動原理はごく単純な所であらねばならぬだろうと思ひます。例えば上の三つの家

を考えてみると、何者かがそれを壊す場合「らい快復者社会復帰セミナーセンターは二重に疎外された……だから壊してはならない」などと認識の階段を降りて、それから「壊すのを許さないぞー」などと行動してみても、しれてるということです。自分で無駄な時間を費やせば費やすだけ、認識などといった『私』から離れたものを媒介とすることなく反射行動はあると思ひます。ワークキャンプ⇨手労働集団の方法論は（ブルトーザでなくツルハシとスコップと一輪車と丸太棒と肉の疲労に象徴されてるように）『私』と『対象』をいかに同一化（⇨結婚）させるかに対し、認識（理性）ではなく（市民）、様々な手づくりによって、それに無駄な時間を費やすことにより、自らの感性（情念）でもってする（土民）のだと思ひます。（小中陽太郎の「手づくりの論理」（合同出版）は手労働集団に学ばねばならない）だからこそ例えば「らい」にしても、つい二人で酒を飲みすぎるとか、手紙を書き過ぎてとか、何か祭をいっしょにやっちゃって無駄な時間を共有したことのため、具体的な顔が浮んでしまふ人たちが『私』に『らい』（という意識は消え誰さん）がという緊張で

もって、反射行為を示すことができるのだと思う。ぼくの義理人情論も『私』を『対象』に様々な手づくり法によって無駄な時間を費やすことでもって、自己拘束することでもって、最も強烈なエロチシズム的な主体を発見できるのではないかあたりにはじまるのです。「運動」のはじまりはそれなのだと思います。だから、それがなくなってもまだコールサインがあるそんな集団は、いつのまにか集団という名の組織の幻想にとらわれたに過ぎないのでしょう。ワークキャンプの方法論は残っても、ワークキャンプ自身が生成消滅をくり返しておるのは、運動の基盤であるエロチシズム的な主体を視点にして確認しておかねばならないと思うのです。それは政治的であるより以前の、ずっと深い人間の生活につながってくるからだからです。

1 ハガキの意味

全国15（沖縄を含み、身延を除く）のライ療養所に生活する約一万人の人々に、ライであること、ライ療養所で生活していることと一番感じ、叫びたいことがあったら書いて欲しいという趣旨でハガキを配って歩いた。今まで「日本に約いちまんのライ者が……」と書いてきた。その『いちまん』のひとりでもが、いちまんのひとりではなく「……」と書いてきた「……」園の「……才」の「……さん」と変わることの意味は大きいと思ったのです。

それだけ、『私』と『対象』が近くなる可能性を感じるのです。だが、九州・奄美方面へまわった内野・太田・屋田が持ち帰った「どれだけほんとのことを書けばいいのですか」と尋ねられて困ったという話は、このハガキが「らい」を運動のテーマにした「交流の家」とって運動以前の何物かへのきつかけ程度の意味しか持たないということでもありました。でも『らいが治った。パインザイ。あれだけ苦しめられたらいがらいがおつたぞー」ドガン。目がさめた。やっぱり、指は曲っていた』（返されたハガキより）等々二千枚足らずの返されたハガキは、自己拘束の構成に無意味だとはいえないでしょう。返されたハガキ二千枚足らずは「らい」でない二千人数らずの人間にとつてしか意味はないような気もします。自分のものとして受けとった『私』が私のもんとして読み返事を書く。もしくは、ロウソクの火で焼く。反バクの会場でハガキを売ることを提案した樋口氏は正当だった）今できることは、返されたハガキを全く料理せず、全て印刷することだと思えます。手づくりの論理。二千人以上の人が『私』を見つける可能性のために。

2 『反戦』と『らる』

『反戦』とは、あなたのどこから出て来たものなのか。戦後民主主義の一つの柱である『平和』という理念を、近代的な国家

概念を越える方向へと発展して、あるいは被害者意識から加害者意識へと発展してでてることの意味はあろうと思います。それだけ、能動的であり、主体的だからです。でも、やはり理念（『平和』がそうであったように）としてしか、今の『反戦』はないうちに思うのです。戦争は現に『反戦』を乗り越えてあるわけで、『反戦』を理念から思想へ実体化していくことこそ今の日本の『反戦運動』に必要ではないかと思うのです。予定されてた8月11日のデモ以外になすすべを知らず、水からあがったカップバさながらであった各々平連はその限界をみせたいように思うのです。『反戦』とおよそ関係なく思われた「らしいの家」が、いくらかでも『反戦』に有効であったのは、鶴見俊輔が言うよりな「ベ平連が大きな火花をうちあげて、大衆をあつめる力をもつにいたったことを評価する。だが解毒剤をつくっておかないと、量への信仰が生れ、支配・被支配の関係がでてくる。反博のなかでも、夜間中学生や『らしいの家』の展示はすばらしく、興行悪に染まらぬ解毒剤があり、尊重したい」（「現代の眼10月号」）といった所にあるのでなく、針生一郎が同雑誌で「独特なテーマに結びつけて人びとにパインナルに深く語りかけることに成功していた。ベトナム民衆の問題と同じ次元でとらえるよう要求しているように思えた」と書いているように、「ワークキャンプ」的方法論による、つまり『私』と『対象』を様々な手づくりによる、両者の主体を誘発し、自己拘束の可能性を深める方法論に根源をもったと思うのです。「らしい

の家」の入口のことは「戦争はおもしろかった。戦場だけが私をへらいVから解放してくれた」は、おそらくどの『反戦屋』にも叫ばれなかったでしょう。理念としての『反戦』は、そうすんわりと出てこないのです。「らしいの家」それは、「反戦以前」の問題という理由もここにあるのです。全ての理念はもつと強固な現実・具体の人間・特殊な事件、個的な感性によって築かれ、それを媒介として伝達されたい限り、壊れていくと思うのです。

最初は、へらいVであることへらい園Vで生活していることでほくらが知らない何かを感じてるのなら書いて欲しい。それをいろんな人間の集まる反バクの会場へ持ち込もうと考えただけなのでした。△反戦Vを叫ほらうなどさらさらないので。「らしい」から「反戦」など、どうしてもでてこなかったのです。「らしい」こそが、一億の中のたった一万である故反戦を叫ぶべきだ」と会場のらく書板にありました。でも、「らしい」でないほくらには、それはできなかつたのです。でも、ベトナム農民でも、学徒出陣兵でも、……でもないほくらが、ある理念に向かう。そのない方法はある。例えば、らしいがあり、被爆があり、未解放村があり、ベトナム兵があり、水俣病があり精薄がありといった共同体から出発するのではないかと思うのです。生活の次元での無数の結婚こそ、原点だと思ふのです。そういう意味で、「反戦」と全くつながらない「らしいを病む人たちのハガキ」の中に、あまりにもといえはいる初歩的な「反戦」への原型があつたのではないかと思うのです。

八月十一日のデモは、ワークキャンプの問題の仕方との違いを話し合い、「交流の家」としてでなく、個人として参加することにしたのです。(個人は多義的であるのに、ワークキャンプ(集団)は一義的なのかという疑問もあったのですが)

ここまで書いて、ぼくは煮え切らないものを感じています。ワークキャンプの方法論が「程度」の問題としてそれだけ自己拘束性の強い方法論であれ、ぼくらは、なおかつ逃避する不解な行動原理をもっています。要は行為の弁証法への良心の問題なのかも知れません。あのハガキの中の「トクナガさん医者になつて園に来てください」をぼくは無視することさえ十分にできることの恐ろしさです。

ぼくらが、国家や政治を簡単にもちださない、『私』と『対象』の結婚の結果としての共有できる生活レベルから出発して、はじめて問題にできるという論理は、そういう良心の問題を根底にしているのだろうと思います。そして、それは、『私』自身の全く個人的な感情であるところに強さを持つように思うのです。

「言葉より行動を」は次のように改めるべきです。

「行動(＝方法)の中に言葉を見い出す」